

【氏名】木山 克彦

【所属大学院】（助成決定時） 北海道大学大学院 文学研究科

【研究題目】

ロシア沿海州における金・東夏代の流通網に関する考古学的研究

【研究の目的】

これまで金・東夏代研究は、主に史書からの検討で、多くの成果が挙げられてきた。しかし、各地域における当時の生活様相、各種文物の生産・分配管理の体制に関しては、殆ど明らかとなっていない。近年、各地域において当該期に属する考古資料の成果が蓄積されており、今後、金・東夏代の様相を把握していく為には、考古資料の分析し、そこから導き出された成果を史書との比較対照を通じて検討する総合的な手法が求められている。本研究ではこのような手法を志向し、その基礎的作業のひとつとして、金代の恤品路（旧；耶懶路）、東夏代の東半部にあたるロシア沿海州を対象とし、ロシア科学アカデミー極東支部に蓄積されている考古資料、特に当該期の政治・経済の中心として機能した城郭から出土した遺物に対して基礎的整理と分析を行うこととした。そして城郭構造や分布の傾向と合わせて、当該期の基本的な考古学的特徴と行政区の統治と物流網を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】

本研究では、金・東夏代におけるロシア沿海州の統治と流通網の実証的な検証を目指した。分析対象は主に城址出土の土器とした。当該期研究では、「銀牌」や「鏡」といった地域を越えて広域分布する産品が注目されてきた。これに対して、土器は他地域からの影響とともに地域性を反映し、地域内部の伝統と地域間関係を把握しうる特性を有する。また城址は、当該期の行政・経済の中核にあり、その構造・分布は当期の統治・物流網を反映する。そのため城址出土の土器資料を対象とすることで、沿海州の当該期の地域的特徴とともに統治・生産・流通の状況を復元することが可能となる。

沿海州の中世期の土器は、殆ど未検討の状態である。そのため、現地資料収蔵機関（於；ロシア科学アカデミー極東支部、2006年10月、2007年7月）において、まずは器形、製作技法等の基礎的な属性の観察・分析からはじめた。また各城址での器種組成の差異、あるいは出土土器の特徴の差異の抽出を行い、城址の分布との相関性について検討した。沿海州における当該期の城址の構造・分布は、主に申請者のこれまでの現地調査・研究成果を用いたが、本研究内でも現地城郭調査を実施し（2006年10月、2007年7月）、その成果も加味し改めて検討を加えた。

また前代からの系統関係を把握するため、渤海滅亡後から金成立期（10世紀後半～12世紀初頭）の城址、土器について現地調査による検討を進めた（2007年7月）。金・東夏代の資料との差異、系

統関係の有無を確認することとした。

また隣接地域との関係性を把握するため、金代の故里改路にあたるアムール流域の土器群との比較も試みた。アムール流域の土器群は、申請者のこれまでの分析・研究成果を用いた（研究期間中随時）。また主に北海道オホーツク海沿岸で金代併行の資料が確認されている。これらについても、国内収蔵機関において実見、分析し、アムール流域あるいは沿海州の土器と比較し、招来ルートの検討を行った（研究期間中随時）。

#### 【結論・考察】

本研究によって得られた主要な成果は次の通りである。①. ロシア沿海州の城郭分布は、河川毎に複数基を単位として配置し、これらが連結して恤品路（耶懶路）を形成する。②. 城址構造、立地から水運の発達と考えられ、間宮海峡から日本海沿岸部では磯回りの外洋交通網の存在が認められる。③. 城郭出土土器については、主要遺跡での特徴や搬入陶磁器の基礎的分析を行ったが、城郭分布で流通網との相関関係までは言及に至らなかった。但し、取得した基礎データは将来的な有効性が十分認められる。④. 遼代併行の当該期の資料（ニコラエフカ文化）を分析した結果、渤海土器との系統性は認められる一方、金・東夏代の土器との関係は現状では認められない。当該資料の年代的下限が、12世紀代に下らないと考えられる。⑤. アムール流域との比較では、両地域に顕著な関係性は認められない。またアムール流域では前代からの系統性が認められ、金・東夏代でも窯業生産は、基本的に在地のものを取り込むと推定できる。⑥. 日本の金・東夏代とされる資料の分析では時期の判定そのものが難しく、仮に当該期とすれば全てアムール流域経由と判断できた。

以上、当初設定した目標まで達成できなかった面もあるが、これらの成果は、いずれも当該期研究における今後の基礎となりうると考える。